



神社本庁

「過疎地域神社活性化推進事業」指定神社

期間：令和三年七月一日～令和六年六月三十日



とまがき

第 26 号

発行：妻垣神社社務所
発行者：宮司 妻垣 常彦
宇佐市安心院町妻垣 203 番地
発行日：令和 4 年 12 月 23 日
電話：0978-44-2519
<http://www.tumagakijinnyja.com>

献燈奉幣祭 ちょうちん行列本殿へ

昨年より当社は、神社本庁『過疎地域神社活性化推進事業』大分県代表の神社に指定され、様々な事業・運営を展開しております。

早くも一年目が終了し、事業報告書を神社本庁へ提出。人口減少・高齢化が進む中での活動が評価され、本年の秋季大祭には大分県神社庁より神日出男庁長、朝久野睦参事が視察を兼ねて祭典に参列。併せて助成金の交付式がおこなわれました。

奉幣行事と幣帛

ほうへいぎょうじ へいはく

お米やお酒などの神饌以外に、神へのお供物として紙で作られた幣帛（大御幣）を奉納する儀式。

かつては絹などの反物で、神の衣服として用いられていた。そのため、人の手が触れることは恐れ多いとされ、串に刺して供えられていた。現在の御幣の起源となる。

この奉幣行事は畿内地方で起こり、全国に広まったが、時代と共に衰退。県内でも実施している神社は数少ない。

本祭典では各地区より奉納された幣帛を、宮司が左・右・左と振り、御神前に供えた。



← 提灯を手に本殿へと進む参加者たち



↑ 日が暮れだす中、祓所においてお祓いを受ける神職と参加者たち



↑ 祭典中、火を絶やさぬよう総代が薪をくめ続け、燃え上がるかがり火

今年の秋季大祭は例大祭の前夜祭として「献燈奉幣祭」を斎行。当日は秋晴れとなり、日没を待って集まった人の数は氏子内外から60名程。忌火を携えた巫女より、提灯のロウソクへと火が分けられ、ご神前に提灯のお灯りを捧ぐべく一同その時を待ちました。

本殿より響く太鼓の音をスタートに行列は提灯の灯りを頼りに薄暗い参道を静々と進みます。境内にはかがり火が、本殿には本祭典のために篤志の方より奉納

戴いたぼんぼりの灯りが灯され、一段と清浄な空気が漂います。

祭典では宮司の奉幣、祝詞に続いて、巫女舞も奉納されました。祭典後には参道の提灯も一斉に灯され、境内は神事中の雰囲気とはまた違った顔を見せていました。



← 参列者に挨拶される神庁長

夏越大祓祈願祭・風鈴まつり開催

一年の半年に差し掛かる六月二十六日、恒例の夏越大祓祈願祭を斎行。総代が奉製した茅の輪をくぐり、日々の感謝、無病息災、そして疫病退散を祈りました。

年々、口コミで祈願に来られる方も増えており、来年からは数回もしくは二日間に分けておこなうことを思案しております。



→ 近年、若い親子の参拝が増えています



また夏の暑い時期、少しでも涼を感じてもらいたい。風の流れの中で神気を感じてもらいたいと始めた風鈴まつり。今年には六月中旬から秋分まで実施しました。

風鈴も昨年より数を増やし、併せてそれぞれの願いが成就するよう「願い短冊」を制作。

「元氣な赤ちゃんが生まれますように」「一日も早く世界が平和になりますように」と一人ひとりの様々な願いが風にのって神様へ届けられました。

特集 松本清張没後30年記念

清張は何故 妻垣神社を目指したのか？

令和4年は昭和の文豪松本清張が逝去されてより30年となります。(平成4年8月4日没 享年82歳)
清張作品は令和の時代となってもドラマや映画で何度もリメイクされており、今尚根強く支持されています。
そのうち氏の作品「陸行水行」にてその舞台として当社が登場します。そのきっかけは氏が作家となる以前まで遡ります。氏の作品にそのエピソードが記されておりますので紹介していきたいと思います。



↑ 共鑰山8合目に鎮座する本宮「足一騰宮」 祭神：比咩大神
清張古代史の原点「陸行水行」にて、主人公川田修一と浜中浩三はこの場所で邪馬台国はどこにあったのか？と話が展開されていく。

『考古学行脚』
(『新気流』第十六号より 昭和三十七年四月一日発行)

私が初めて大分県その安心院という土地を訪れたのは、昭和十七年だった。当時、考古学に多少凝っていた私は、宇佐神宮に興味を持っていた。……
そのころ私の勤めていた朝日新聞に、定年前の老人で、日本全国の神武天皇に関連した土地を調べて歩いている人がいた。石川銀次郎氏といって大阪の本社に勤めていた老記者だったが、たまたま宇佐神宮に行ったとかで、その帰りに小倉に寄ったのでその話を聞いた。
私が安心院の土地に行ったのは、石川氏の話を聞いたのが奇縁の一つだ。
書紀には神武天皇が日向の美々津から船出をして東征に向う途中、豊後水道を過ぎて菟狭^{うさ}で兵船を休めたとあり、仮泊地を「足一騰宮」(アシヒトツアガリノミヤ)と呼んだと記してある。……
ところが、これが現在のどこに当たるのかよく分っていない。今の宇佐神宮あたりであろうと云う者もあり、また別な候補場所も二三挙げられている。

私は五万分の一の地図を拡げてみて、この宇佐川の上流がかなり広い盆地になっていることを「発見」した。……この頃、戦局がひどくなり物資が欠乏していた。私は、もし田舎で甘藷^{かんしょ}でも買えたらと思って、リュックサックを用意して行った。つまり、趣味と実利とを兼ねて出かけたのである。
バスはなかった。四日市から急な山坂を越えて二里の道歩かねば安心院には到達しない。ようやく峠を越えて盆地が見えたときの私の感激は――実際、それは感激という言葉でその記憶を言い表していると思う。山路ばかり歩いた眼には、突然、広潤な平野が下に展がって見えたのである。恰度^{ちやうど}、麦秋の頃で、一面の田は黄色い色で塗られていた。その間に点在する街並みや村落、さらに微かに霞を曳いている連山の裾、こんな所にこのような桃源郷があったのかと、私はそれより少し前に見たことのある映画「失われた地平線」を想像してロマンチックな気分になった。
私は、この地こそ「足一騰宮」の遺跡でなければならないと思った。



↑ 昭和57年「あじむ卑弥呼まつり」出席のため、妻垣神社を参拝。

宇佐両院平和祈念祭

- 沖縄祖国復帰 50 年 -

先の大戦において国民が決して忘れてはならない 4 つの日があります。8 月 6 日の広島原爆の日、8 月 9 日の長崎原爆の日、8 月 15 日の終戦記念日、そして 6 月 23 日の沖縄慰霊の日です。この日は沖縄戦の終結の日として、沖縄は慰霊の祈りに包まれます。

令和四年は沖縄県が祖国に復帰してより五十一年の節目の年。地上戦が繰り広げられ県民の四人に一人、約 23 万人もの犠牲者を出した沖縄戦。終戦後、占領軍の統治下となり、日本が独立した後もアメリカ軍の占領下が続き、27 年後の昭和 47 年 5 月 15 日、ようやく日本国に返還されました。

みたま慰めの舞
昭和三十二年 香淳皇后御歌
やすらかに眠れぞと思ふ 君のため
命捧げし ますらをの友

当社では恒例の平和祈念祭を八月二十八日に斎行。昨年に引き続き「みたま慰めの舞」をご神前に奉納いたしました。沖縄戦は安心院の人々にとっても他人事ではなく、安心院町内だけでも 20 名近くの方が沖縄に於いて戦死されています。



↑ 忠魂碑前にて舞を奉納する巫女



← 沖縄方面戦死と刻まれた供養塔

↓ 県内若手神職と共に大分の塔で慰霊祭を奉仕する宮司

沖縄県大分の塔に赴き、慰霊祭を斎行 鎮魂と平和への感謝を祈って

沖縄県糸満市には「大分の塔」という沖縄戦で亡くなった県出身戦没者の慰霊碑があります。現在、当社宮司は県内若手神職の団体「大分県神道青年会」の会長を務めており、去る五月十一日、沖縄祖国復帰五十周年を記念して、現地大分の塔にて戦没者慰霊祭を斎行しました。

沖縄戦終結の 6 月 23 日、この時期は沖縄が梅雨明けする頃です。沖縄戦は梅雨の悪条件の中、人々は銃弾や火炎放射から逃げ、山・海岸へと散って逝かれました。

沖縄が祖国に復帰して 50 年。あの戦争の痕跡はまだまだ続いています。米軍基地、それに伴う土地問題、軍属による暴行など、戦後 77 年が経過しても尚、解決への道のりはまだまだ遠く、我々は我がこととして考え、解決の努力を怠ってはなりません。



安心院町安心院校区内 沖縄戦における戦没者

安部	友顕	24	大口田	陸軍伍長	昭和 20 年 3 月 24 日	東シナ海	戦死
後藤	才	36	大口田	海軍上等兵曹	昭和 20 年 3 月 27 日	南西諸島	戦傷死
大江	道大	23	龍王	海軍少尉	昭和 20 年 3 月 29 日	沖縄本島	戦死
望月	九州男	18	恒松	海軍少尉	昭和 20 年 4 月 6 日	南西諸島	戦死
小川	国松	25	下毛	陸軍兵長	昭和 20 年 4 月 15 日	沖縄本島	戦死
石川	芳行	23	莊	海軍大尉	昭和 20 年 4 月 31 日	南西諸島	戦死
松田	武	22	下毛	海軍航空大尉	昭和 20 年 5 月 11 日	南西諸島	戦死
中原	維敏	31	木裳	海軍軍属	昭和 20 年 6 月 6 日	沖縄本島	戦死
小野	秀人	36	古市	海軍整備兵長	昭和 20 年 6 月 14 日	沖縄本島	戦死
上鶴	則夫	24	大仏	陸軍主計曹長	昭和 20 年 6 月 20 日	沖縄本島	戦死